

土木工学による邪馬台国地理の解明*

Civil Engineering Geography of Yamataikoku in the Third Century

小合彬生**

By Akio OGO

Abstract

The centuries long studies have not yet been defined the palace location of the lady ruler Himiko. The author wishes to propose a physical solution here, through a series of civil engineering considerations, following as close as possible to the original Gishi-Wajinden wrote in the third century China.

This study concludes that a) Yamataikoku consists of 27 allied countries, b) the capital is Ito-no-Kuni where the male king dominates and c) the lady ruler Himiko is in the Fumi-no-Kuni sanctuary.

The colored map shows the geography of the whole country, inhabited by 70,000 Wa-Jin families.

1. まえがき

3世紀卑弥呼女王の国は、たしかに倭人の手で成立し、中国の歴史書「三国志」にその記録を止めている。¹⁾

しかしながら、江戸時代における新井白石、本居宣長などの国学者の研究に始まり、1910年白鳥庫吉、内藤湖南に始まるいわゆる東大-九州説と京大-大和説の論争を通じて、問題は解決したとはいえない。すなわち、魏志倭人伝の記述に矛盾しない地図が、いまだ発表されていないのである。

地理、交通、都市、国土面積など、いままでと異なる視点からの分析が必要である。考古学からのアプローチとは決別する。いま必要なのは、原典記述の論理的な解釈と、現実の地形での検証である。例えば、土木工学の知見を用いた地理学からの裏付けが科学的な版図の作成に大いに役立つと考える。

当研究は、当時唯一の貴重な資料、三国志魏書東夷伝倭人の項(以下、魏志倭人伝あるいは倭人伝と云う)約2千字に忠実にその解明を続ける²⁾。漢文に馴染みのない人も多いと思い、標準的な解釈とされる岩波書店の読み方³⁾を必要に応じ付けている。しかし、2~3の点でその解釈を変えねばならないことも指摘しているので注意して見ていただきたい。

2. 3世紀帯方郡から女王の都への旅

倭人伝によると、西暦240年、帯方郡から倭の女王国へ、郡の使節が送られた。初めての倭人国への旅であり、記録が残されたはずである。帯方郡の位置はいまの韓国・京城の近くであったことは確かといわれる。目的地の倭国の女王宮の位置は、分っていない。大まかにいって、いま九州説と大和説(奈良)に別れているが、その他にも100以上の提案地がある。

しかし、図-1のような現在の地図を用いて当時の行程を辿れば、その問題点をかなり浮き彫りにすることができる。

魏志の東夷伝によれば、馬韓・辰韓・弁韓からなる三韓諸国は計14~15万戸で、「方四千里」の国土を有していたという。⁴⁾ 下のように朝鮮半島の地図では、4千里がほぼ280kmになる。

つまり一里は70mの計算になるが、それはここだけの特異な里程と疑う人も居る。筆者としては、記述されている通り、1里70mの、いわゆる「短里」に沿って論を進めたいと思っている。

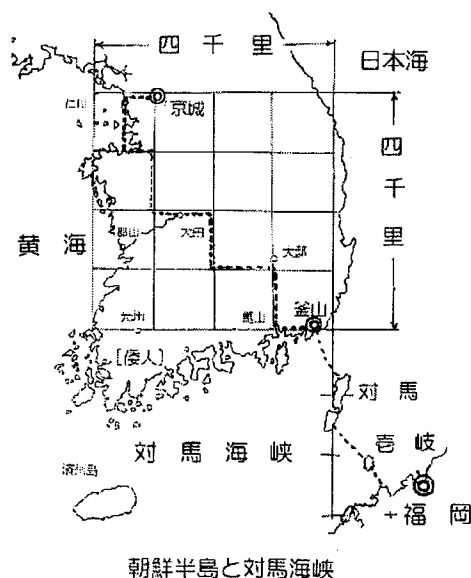


図-1 3世紀、帯方郡使の倭国への旅、(国土地理院地図より作成:小合彬生)

* keywords: 邪馬台国、魏志倭人伝、卑弥呼

** 正会員 鉄建建設株式会社 非常勤嘱託

(〒530-0018 大阪市北区小松原町2-4 富国生命ビル)

「郡から韓国を歴て狗邪韓国までの七千余里」の行程を分析する。当時、釜山付近にあった狗邪韓国まで、現代の特急セマウ

ル号は、京城から鉄路 440 km で結んでいる。釜山と博多の間、対馬海峡は 220 km。ビートル号水中翼船は 2 時間 55 分で結ぶ。

これから容易に、京城～福岡間の距離は、約 700 km と分る。また他の経路として、京城～釜山間を朝鮮半島沿いに周航する説もあるが、その距離はこの図上で目測しただけでも、到底「七千余里」には収まらない。「万二千里」に近い。筆者は、郡使は内陸を、記述通りに「韓国を歴(へ)て」進んだと解釈する。

倭人伝は、使節は海峡を渡り、現在の唐津市にあった末盧のクニに達すると記す。郡から女王の都まで「万二千余里」、そのうち、末盧までが「一万余里」、残るところ「二千余里」である。

問題はこの道程の解釈にある。これを、図-2 で説明しよう。

至文堂』のなか、59 頁につぎのように、「伊都国」の重要性を指摘する。そしてその重要性の指摘が、率直に発表できなかったことも加え、こう書き残している。

「私は、かつて伊都国を女王クニの政治外交の中心であるとして、橋本博士の叱正を受けた。」この橋本博士とは、恩師橋本増吉博士(1800-1900)である。

「この国は女王の領域のなかでも特異の位置を占めていたのである。」と榎博士は無念そうに述べたあと、「伊都国以下がこの国からの方向と距離とを示していることはこの点から考えても異とするに足らないだろう。」こういって、伊都を首都とする説から転進、伊都を基点とする有名な「放射状説」を提起した

邪馬台国への旅のまとめ

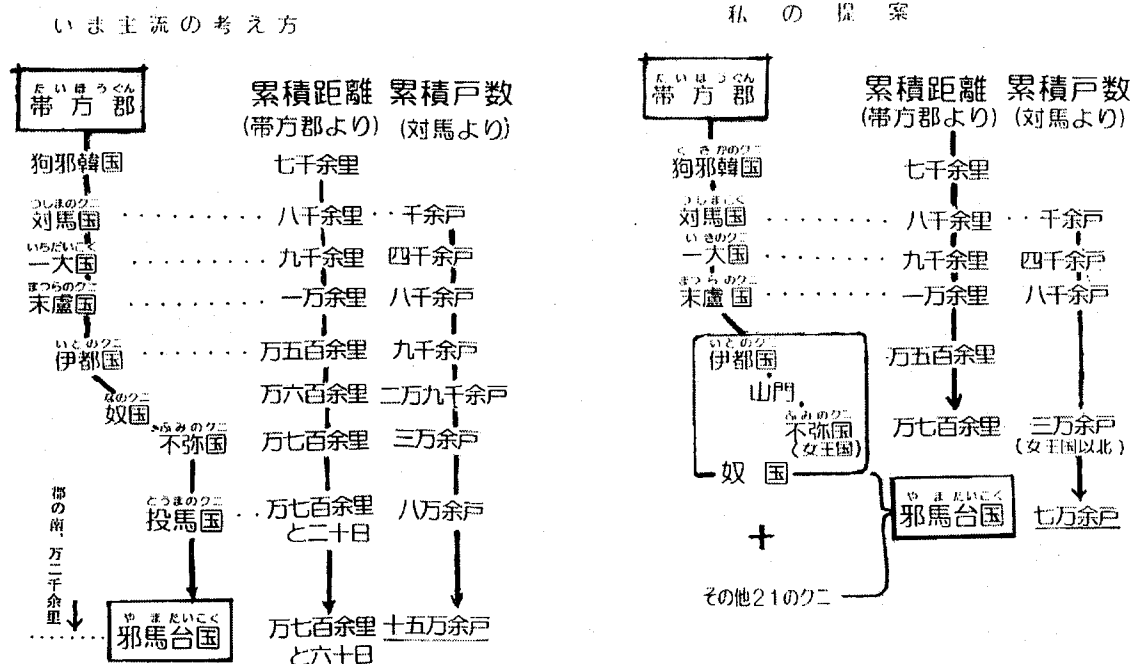


図-2 女王の都までの行程 (右の原図から作成:小合彬生)

(原図、安本美典:伊都国中心放射式コースと順次式コース⁵⁾)

いままで主流となる行程解釈と、筆者の提案を左右に対比した図である。たとえば、安本美典の「伊都国中心放射式コースと順次式コース」という図に代表される「いま主流の図⁵⁾」のひとつに、筆者は「累積距離と累積戸数」の数値を加え示している。

投馬国と邪馬台国の位置に、大きな差異が見られよう。

3. 旅程記述の土木工学的分析

伊都の国までの行程については、いままでの研究はほぼ一致しており、まず問題はない。伊都国から先について、この図でも分かるように、右と左で相違が生じる。原典では、他の諸国に用いられた「至」の字と異なり、伊都にのみ「到」の字が用いられている。(なお、構成する各国は「クニ」で表す)

よく読むと、伊都に、幾つかの王がいたことも記されている。伊都の重要性に気づいた人として榎博士が有名である。榎一雄元東大教授(1913-1989)はその著書『邪馬台国、昭和五十年四月、

のである⁶⁾。しかしながら、「伊都中心説」を諦めた榎説では、郡使たちは伊都から南に、水行陸行を何日も続けるはめに陥ってしまうのである。地理からいえば狗奴国(今の熊本県など)を敵中突破するという大きな矛盾を抱えてしまう。

ごく最近、歴史とは分野が違うが、J Rのジパング倶楽部誌、平成 17 年 3 月号で、森浩一は新たに邪馬台国論を発表した。その中で、森博士は伊都の重要性を強調し、ここに女王国があったと述べている。九州説の大御所といわれる氏が、ついに伊都に都があったという結論に達したのである⁷⁾。

しかし、倭国の王と女王が共に伊都にいたという矛盾は残されているし、女王国がどこであるかも示していない。

最近の邪馬台国論争には、このように原典の論理的な解明をめざすものが多く、そのため推理作家や他の専門分野からの積極的な参加がみられる。従来からの考古学的な遺跡、遺物研究とは別の学問を形作っていることに注意しなくてはならない。

さて、筆者は伊都から先の2つのクニが、お互いにごく近くに立地していることに注目する。奴国に比して二十分の一の国が、日帰り圏内に存在することから、小さい方の2国はその衛星都市であると考えたのである。

すなわち、筆者の結論は、「帯方郡からの使節は、伊都国に到り常駐する」そして、里程の最後に記された「不弥国」のレゾンデートルを考えれば、「千余家」という小さい不弥が、「女王国」以外のクニではありえないことを見出したのである。

伊都の王が、女王国を「代だい統属する」点も両国が奴国の衛星都市であれば納得し易い。都市工学的発想が、このような結論に導いたのである。

図-2に戻り工学的検討を続けよう。左の累積距離の記述で、投馬国と邪馬台国のところに、「万七百余里数と二十日、さらに、万七百余里と六十日」の記述が見られる。自然科学では、次元の異なる距離と時間をこのように直接加えることはない。

しかも、左端に小さく記したように郡から邪馬台国までは、「万二千里」の記述があるから、伊都国から女王の都へ「残り千五百里」となる。これは対馬海峡の半分、唐津市-前原市間の3倍の距離になる。これに対し、こここの、「六十日の旅程」はどうみても過大である。ここに存在する矛盾は、非常に大きい。

しかしながら、原典を素直に見直し、女王が不弥に、倭王が伊都にいたと考えれば、もはや、その矛盾は存在しなくなる。

岩波文庫、石原道博編訳の倭人伝では、「女王国より以北、その戸数・道里は得て略載すべきも、その余の旁国は遠絶にして得て詳かにすべからず⁸⁾」である。これまで筆者は、この「道里」は、里数だけを数え、「時間の次元」を持つ日数は含めないことを提案している。この結果「女王国」は、論理的に、以北6ヶ国の南端に記された「不弥」のクニと決まるのである。

図-2において、左右両論を比較した結果、右にある筆者の提案には、過去の問題点、矛盾が大幅に解消していることが認められると思う。繰り返すようであるが、邪馬台国の姿を取りまとめれば、卑弥呼が都するところは「不弥国」であり、男の倭王が居るクニは「伊都」である。邪馬台国は「女王国以北の6つのクニ」と「その他21のクニ」の合計、27のクニ、つまり女王連合国であって、その合計戸数が7万余戸であった。女王が祭祀を司った宮殿は、帯方郡の南、万2千余里（じつは万7百余里）にあり、そこへの行程は水行が10日と陸行が1月の合計40日であったことになる。

4. 短里（倭・韓のローカル里程）と中国の長里

古田武彦はその里程論の中⁹⁾で、白鳥庫吉と内藤湖南が対峙した時、彼らの里程認識がともに間違っていたことを指摘している。白鳥は、倭人伝における「里程」は「いたずらに里数日数を誇張したもの」と認識しており、「約五倍の誇張」であると述べたという。これに対し、論敵、内藤湖南も、「不確実なる道里」に関し、「邪馬台国」探究の方法から除外すべきを主張しているという。その後東大派、京大派ともに、「倭人伝の里程は先行する議論では、軽視されていた」のである。

中国人の記述は信用できない。表現に誇張がある。こう信じ込んだことがこの問題を解き難くしていたと古田は結論する。

多くの古代史研究家は、常識として、魏時代の一里は、いまの約400mであったと考えていた。白鳥、内藤の両氏も例外でなく、倭人伝の行程が地理上の現実と合わないのは誇張のせいだと考えていたのである。

この点に関しては、安本美典は、責任編集する「季刊邪馬台国」の第35号に「総力特集・里程の謎」を¹⁰⁾組み、議論・資料の集積を図っている。その中で安本は、「広い中国において、時代的、地域的にさまざまなモノサシが使われた可能性がある。著者陳寿はもとの史書・資料にあった「里数」を尊重しそのままのせた可能性が大きい」と記し、短里存在を肯定している。

倭人伝の一里は、先に約70mと述べたところであるが、その他の4例を含め、当時のデータを表-1にまとめておく。

帯方郡から狗邪韓国の間、「七千余里」は、鉄道線路によって測ったため、1里63mと短い。不思議なことに朝鮮半島東西兩岸の間と対馬海峡が、ともに1里70mとなっている。GPSを用いて計ったような正確な結果に驚いている。

倭人伝のクニグニでは、壱岐の島と、末盧(唐津市)-伊都(前原市)の里数がkmに換算され、1里はほぼ70mであったことを示している。

表-1 倭人伝などが記述する里数と現在のキロ数の比較
(安本美典、吉野ヶ里遺跡と邪馬台国、大和書房、1998年、表1を修正して筆者が作成：小合彬生)¹¹⁾

区 間	① 里数	② キロメートル	③ = ②/①
	倭人伝記述	現在の距離 (km)	百里当たり km
1) 帯方郡-狗邪韓国	七千余里	鉄道沿い 444km	6.3km
2) 対馬海峡を渡る	三千余里	地図上 210km	7.0km
3) 朝鮮半島東西岸*	四千余里	地図上 280km	7.0km
4) 一大国のサイズ	三百里	地図上 20km	6.7km
5) 末盧国-伊都国**	五百里	鉄道沿 30~35km	6.0~7.0km

* 東夷伝による

** 歩測の里数が解明しやすい (前原市30km、周船寺35km)

3世紀末調査の倭人国へ上陸した郡使たちは、情報収集のための測量器具や時計もなく、記録する紙すら充分にない状況だったと推察される。この場合、歩測が行われたのではないだろうか。百歩で1里=70~77m、1万歩が、百里=7~7.7kmという測量ができる。まったく道具のいらない計測方法であり、3世紀でも僻地で採用された可能性は高い。

ここでは距離測量の方法を考察したが、3世紀魏の使者が書き残した「里数」は、いわゆる「短里」によると結論できる。測定は歩測によって行われ、百歩の「歩み(ステップ)」(中国古代の計測単位、約1.4mの「歩」ではない)をもって1里とした非常にシンプルな計測方法であったと考えられる。¹²⁾

5. 邪馬台国のかたち—7万余戸の倭人国

邪馬台国は、記述によると七万余戸の大国である。図-1のところでも述べたが、東夷伝の中¹³⁾、朝鮮半島南部の三韓諸国には、

3世紀当時の国土面積が記されている。馬韓、辰韓、弁韓の3国で14~15万余戸であり、国土は「方四千余里」を占めていたという。千里四方の土地に1万戸弱の居住密度になる。戸数密度は70km四方の土地に1万戸弱と計算できる。

「女王国以北を略載した。」で、一度文を切り、「[その余の旁国は遠絶にして得て詳かにするは得ざるも、次に斯馬国あり、次に已百支国あり、・・・]と、21個の国名が続くのです。

そして、その他のクニグニは遠旁にあると書かれているが、郡使達は伊都のクニに常駐したとの記事もある。阿蘇山、関門海峡の見聞もなく、隣接の諸国を訪問したとも書かれていない。「その他21ヶ国」は、意外と女王宮の近くに立地していたらしい。

邪馬台国女王連合は、27のクニグニから成り、7万余戸であ



図-3、邪馬台国のカラー地形図 (国土地理院 20 万分の1地形図よりパネルを作成、撮影、加工：小合彬生)

この数字は貴重な当時の記録である。青銅器、鉄器と文明が進んできた3世紀当時、中国本土に比べ文化の普及がやや遅れていた韓諸国であろうが、その居住密度が、倭人国のそれと大差なかったと考えるならば、倭国の概算値として利用できる。

ともかく当時、邪馬台国の面積を推算できる近隣諸国における唯一のデータである。朝鮮半島南部と九州はともに温帯湿潤気候を持つ照葉樹林帯に属し植栽も似ている。同程度の戸数密度とすれば、七万余戸の邪馬台国は、ほぼ3~4万km²の国土面積を有したと算定されるのである。

岩波文庫、石原道博編訳の倭人伝に戻ろう。女王国以北の6ヶ国、3万余戸について説明が終り、「その余の旁国」に関する説明に入る。ここの解釈で筆者は以北国とその他国の記述を否定的な「略載したが、」という文の繋ぎ方を止めることを提案する。

と筆者は考えている。女王国以北の戸数3万余戸を除いた残り、4万余戸が、「その他21のクニグニ」の戸数になるはずである。クニグニは、平均すると2千戸程度、朝鮮半島南部と同じ居住密度を持つとして、1つのクニの領土は約4百里四方になる。現在ならば、約20km四方である。目安としては、壱岐ノ島のサイズが分かりやすい。

また、かなりの大国、「五万余戸」の投馬国も、同じくらいの住居密度とすれば、25,000km²の国土になるはずである。

工学的には概算値であっても、提案されている多くの邪馬台国候補地を科学的に絞るうえで貴重な数値といえる。

原典には、いま述べたように、「次有〇〇国」の記述が21回も繰り返されている。クニグニが順に並んでいることをこれだけ強調しているにもかかわらず、順に並べた版図の提案が少ない。

望まれる版図の作成には、「その他 21 のクニ」を順に並べることから始まる。21 のクニの順番を重視して作成した邪馬台国の版図は、長崎県、福岡県、大分県、佐賀県にまたがる、約 3 万 km² の国である。東には周防灘があり、南にはライバルの狗奴国すなわち、いまの熊本県がある。

その他 21 のクニは、記載順に番号を打った。また、研究者間の慣例に従い、女王連合の構成国は、カタカナの「クニ」で表している。クニグニは、北九州の海岸線に沿って時計回りに並び始める、内陸部に移ってもう 1 組、合計 2 組のチェーン状配置が記録されていたことが分る。

糸島郡のシマ、ミヤジ、イサザ、クキなど現在の地名に、語感が伝えられているクニが多い。このことが、この配置推察システムの精度が高いことを裏付けている。

奴のクニの内戦時におけるライバルが、いまの飯塚市にあった為吾（いご）のクニである。別府には呼邑（こゆ）があって、瀬戸内海地区と貿易を行っていたと推察される。このように、この版図によって内戦の様子や、貿易の様子が推理できるようになった。

*** 21 のクニグニの配置 ***

かくして、地形、高低を色分けした「邪馬台国・女王連合 27 個のクニグニ」の地図を作成することができた。図上で、黄色が米作をイメージした、標高 100m までの地帯。緑色が森のイメージを表す標高 100~200m の地帯。茶色は、200m 以上の山地を表す。平地の広がった部分に、「クニの中心」を配し、地形図を完成した。

クニグニの配置を、記述順に述べれば以下ようになる。

①シマノクニは糸島郡あたり、②ミヤジのクニは宮地岳・津屋崎付近、水巻町の③イヤのクニ、洞海湾の④クキのクニ、行橋・箕島の⑤ミナのクニ、中津市の⑥ココツ、宇佐市の⑦フコ（謎の深池あり）・・・と順に比定して行くことができる。

その他、別府市には⑪コユのクニ、丹の産地は産物にちなむのか⑫カナスナのクニ、奴の最強のライバルは地理からして⑭のイゴ（飯塚市）である。伊川温泉がその名を伝えているのだろうか。⑬のキのクニは、⑫と⑭の間にあればいいが、ここでは仮に大分県の方に図示した。⑯ヤマのクニ、⑰クジュウのクニ、⑱ハリのクニそして⑲キイノクニと続く、⑯から⑲の 4 つのクニは以前から並んでいると思われていたが、全体の配置の中で正しく順に位置づけられた。西の端は佐賀・吉野ヶ里の⑳ウナのクニである。最後は再度記されている「奴」のクニである。これより南は、狗奴国（熊本県など）に接することとなる。

6. 邪馬台国のサイズを検証できる「周旋五千余里」

倭人伝では、ひとまとまりの記述の最後には、段落を示すため、大切な文章を配している。「周旋五千余里」もそのひとつである。ちなみに、つぎが段落直前の記述例である。

- ・女王は帯方郡の南、万二千余里（実は万七百余里）にいる。
- ・女王の都（不弥国）へは、水行十日陸行一月かかる。
- ・兵士が武器を持ち、女王を守護している。

ここでも、石原道博編訳の倭人伝と少し見解を異としているが、ここまで、論展開の中で大半述べてきたところである。

三番目の原文は、「・・常有人持兵守衛女王国東渡海千余里・・」である。石原道博編訳は「常に人あり、兵を持して守衛す。女王国の東、海を渡る・¹⁴⁾・」と守衛の次で文を切っている。

筆者の提案する訳は、「兵を持して女王を守護す。」と、ここで一旦文を切り、「国の東、渡海一千里で・・」とつぎの文を始めるのである。これにより、「女王国」の定義が混乱する心配がなくなり、女王国が不弥国であると安心できるのである。

すなわち、不弥が女王国であるとすれば、不弥のクニの東は博多湾、一千里の海は存在しない。ここは、当提案のように、岩波文庫の区読点を直し、その読み方を修正すべきであろう。

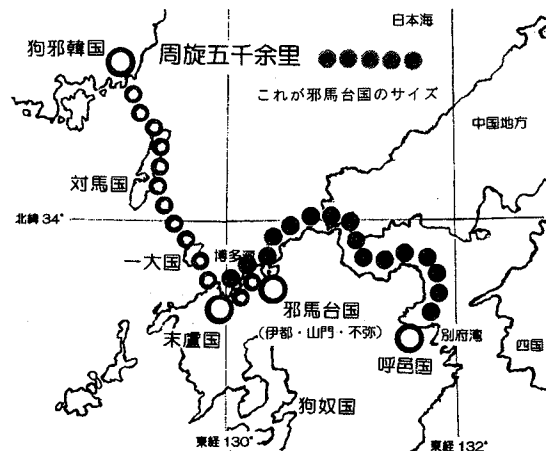


図-4 邪馬台国のサイズは「周旋五千余里」（国土地理院 20 万分の 1 地図より作成：小合彬生）

さて、この「周旋五千余里」記述は、クニグニの配置が正しかったことを証明するのである。地図の上で、「この国の周囲を船で巡航するとほぼ五千里である」を、具体的に示している。

五千余里とは狗奴韓国から女王の都までの距離でもある。今の釜山市から福岡市の西区まで、唐津市経由で約 300 km の部分にあたる。図では、白丸で表示している。

さて、国の周囲を船で巡るとなると、起点に選ぶのは島ではなく、海岸のはずである。この国の海岸線が始まる場所は、西北部では唐津市である。ここから、九州北岸に沿って東行し、関門海峡から周防灘に出て、国東半島を廻り、別府湾に着くコースとなるだろう。12~13 のクニをつなぐと、クニの平均サイズが「四百里くらい」であり、計算上「五千余里」になる。末盧から呼邑（こゆ）間がその「周旋五千余里」に対応すると考えられる。上の図では、この「周旋五千余里」を黒丸で示している。対馬海峡を渡り女王の都に到る白丸の「五千余里」、釜山市から福岡市に至る 300km 弱の行程と、ほとんど同じ距離であれば、倭人伝の記述が正しく解釈されていることになる。

図上で、白丸と黒丸の数が、ほとんど同じことに注目してほしい。倭人伝記載の通り、両者とも「五千余里」だったのである。これにより、筆者の原典理解がほぼ妥当であることが了解されるのではないだろうか。

もうひとつ距離の記述に関して筆者の見解を示しておく。石原道博編訳の倭人伝では、邪馬台国への行程は、「南、邪馬老国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月」とされ、さらに、

「郡より女王国に至る、万二千余里」¹⁵⁾と締めくくられている。注意すべきは「邪馬台国までとは記されてなく、女王の都まで、あるいは女王国まで」と書かれていることである。なにしろ3-4万km²の大国である。その入り口は対馬のクニ、伊都までは、そこから「二千余里」かかる。

帯方郡から女王の都までは「万二千余里」である。狗邪韓国から女王の都へは「五千余里」、末盧から女王の所へ「二千余里」、そして伊都からは「千五百余里」と計算される。

短里を使えば、伊都のクニから直線距離で測って、105km以内に女王がいることになる。筆者の説では「千余家」の小さい女王宮は、思ったより伊都に近く立地していた。記述された数値を加えれば、帯方郡より「万七百余里」、伊都のクニから「二百里」の所だったのである。筆者は、ここで残ってしまった「千三百里」の行程は、誤差、つまり、まったくの「余里」であると考え。しいて言えば、途中の島々の横断距離が加算される場合、ほぼ辻褄が合うのだが、ここは無理はしない方がいい。

帯方郡使の報告書は、邪馬台国の国土、戸数などについて、充分な情報を記録していたのである。

記述された戸数は、たぶん、当時では常識であった1戸あたりの兵士の数を乗ずれば、たちまち兵力の算出ができたことであろう。また、国の北端・対馬から、東の端・別府湾までの距離も、ここで考察したように、「七千〜八千里ばかり」と簡単に計算できるようになっていたのである。

7. 邪馬台国論争の基点

邪馬台国論争においては、いわゆる「長里」の適用が伝の解釈に無理を強いており、ほとんどの問題はそこに起因する。

これまでわが国研究者の多くが、記述された1里が、現代の4kmあるいは「古代中国の長里、約400m」という尺度¹⁶⁾を用いたため、女王の都の比定地が、はるかに遠くへ拡散することになった。例えば、伊都から女王の都へ「千五百余里」も、短里なら105kmであったが、長里なら約600km、近代の里(4km)を用いた時は、じつに6,000kmに達してしまう。

このように里、尺などが、時代、地域によって大きく変化することに、注意しなくてはならない。伊都から女王の都への「千五百余里」の場合、約400mの長里を用いれば、博多・大阪間の約600kmとたまたま一致し、大和説論者の論拠にもされてしまう。

女王の都する所へは、「郡から南へ万二千余里」と記述は結ばれている。その解釈にあたり、「長里」を適用すると、帯方郡からのトータル距離が、信じられないような値、4,800kmになる。実際には、700kmほどの距離であることは説明済みである。

ここで、合理的な原文解釈法を探せばよかったが、つい奈良県に「大和」があったという思い込みがあり、中国人の記述の方に誤りがある。倭人伝は信じられないと曲解されてしまった。

邪馬台国論争の分かれ目は、工学的にいえば3世紀の倭人伝に用いられた「短里」を信用するか、しないかにあった。

「長里」を用いた人々は、記述につぎつぎと矛盾が発生する事態に陥り、中国人使節や倭人伝の記述に疑いの目を向けてしまった。原典の記述を信用しない人たちが、以後原典を改変しながら、卑弥呼女王の国を探し回ったのである。

有名なのは、南へ向かって旅を想定、沖縄か、ジャワに達する説。これではおかしいので、実はこの南は東の間違いであったという、筆記の際の誤写説などである。

しかし、そんなに大騒ぎすることはなかったと筆者は考える。そのまま、倭人伝を読んでいたら、邪馬台国はもう見つけていたのである。もっとも矛盾の少ない読み方を探す方法として、オペレーションズリサーチのリニアプログラミングがある。これに似た手法を当論争に導入すれば、工学的に、まあ妥当という解に到達できるはずである。

これまで「謎」とされてきた邪馬台国のありかや、版図、その統治機構まで、この思考方法の導入で容易に明らかにされると思う。

女王連合国の機能は、奴の都心内で「伊都と不弥」に配分されていた。帯方郡から倭国に出向いた使節は、「伊都に到り、そこに駐まる」と読むことも大切であった。この「伊都」の用字も、ここが倭人の都であることを知ったうえで用いられている可能性が高いと分ってくる。

行政、軍事、祭祀などの条件も、地理的な条件と絡み合わせて分析することが、この研究には欠かせない。

伊都に王がいる。帯方郡使達、監察官である一大率もいる。ここが邪馬台国の軍事・外交・行政上の首都なのである。

そして郡使は、伊都から南へ旅を続ける必要はもはやない。

筆者の邪馬台国論では、西区愛宕の丘の上、「うみの宮」が祭祀の中心であり、女王卑弥呼がいたと結論する。邪馬台国でただ一人の「男王」は伊都にいて、代々皆女王国の面倒をみていたとの解釈である。原典では、伊都に「世有王、皆統属女王国」と書かれている¹⁷⁾。この部分は、そのまま受け取るのがよかったのである。

邪馬台国が見つからなかった理由の第二番目は、その「都心の姿」が理解しにくかったからではなからうか。二つの衛星都市に、連合政権の中核機能が配分されていたと考えることで、原典に矛盾のない倭人国の姿が初めて見えてきたのである。

また、この伊都、山門、不弥の距離を、理解しやすいよう、いまの東京に置き換えて見ると、それぞれ高輪・丸の内・上野公園くらいの位置関係になる。

いま一度述べておくが、当論は土木史研究のために書かれたものであり、考古学の論文ではない。史跡遺物に裏付けがないのは専門上いたしかたないと思っている。将来、伊都、室見川などの地点で予想された遺跡が発見されることを心より期待したい。

筆者が考古学者に望むのは、平原遺跡に埋葬されているのが天照大神ではなく、じつは卑弥呼ではなかったか、再度検討してほしいし、三角縁神獣鏡や、漢の金印についても、先入観にとらわれない究明をさらに進めてほしいこと、などである。

8. おわりに

結論を繰り返せば、筆者の論は「九州説」である。今回提案している邪馬台国の地図がこれからの議論のお役に立つことを心より願っている。最後にあたり、この歴史上の議論に、当学会、当研究会で、自然科学的あるいは土木工学的な解明を試み

る機会を得られ大いに感謝している。

また、これからもこの研究が、当学会において続けられることを心より期待するものである。

(2006年3月)

参考文献

- 1) 石原道博編訳：『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・随書倭国伝、中国正史日本伝（1）』岩波書店、1988年。
(魏志倭人伝、倭人の項が、当論で引用するテキストである。)
- 2) いずれも拙論であるが、以下の4論文をあげる。
 - 2-a) 小合彬生：土木工学で邪馬台国に挑む、土木学会誌「ひろば欄」、土木学会、pp. 43-48、1989年10月。
 - 2-b) 小合彬生：伊都までの水行陸行と邪馬台国、『第24回土木史研究会講演集』土木学会土木史研究委員会、pp. 323-330、2004年。
 - 2-c) 小合彬生：邪馬台国その首都と版図『第25回土木史研究会講演集』土木学会土木史研究委員会、pp. 327-331、2005年。
 - 2-d) 小合彬生：三世紀ひみこの宮への陸行水行、『兵庫歴研』第20号、兵庫歴史研究会、pp. 30-38、2004年。
- 3) 前掲文献1), pp. 39-54、注の付いた読み下し文を利用する。
- 4) 今鷹・小南・井波共訳：『三国志（Ⅱ）』世界古典文学全集・第24巻B、筑摩書房、pp. 302-305、1993年1月。
- 5) 安本美典：『吉野ヶ里遺跡と邪馬台国』、大和書房、p. 142、1994、7、30、(図4 伊都国中心放射式コースと順次式コース。)
- 6) 榎一雄：『邪馬台国』、至文堂、p. 59 1年、
- 7) 森浩一：「伊都国は女王国の都」、ジパング倶楽部、ジパング倶楽部事務局、pp. 64-65、2005年3月、
- 8) 前掲文献1), pp. 42
- 9) 古田武彦：「里程論」、『風土記にいたる弥呼-古代は輝いていた-I』、朝日文庫、朝日新聞社、pp. 192-226、1995年5月。
- 10) 安本美典編集局：「総力特集・里程の謎」、季刊邪馬台国-第35号、梓書院、1988年春号、(関連論文満載の特集である。)
- 11) 安本美典：『吉野ヶ里遺跡と邪馬台国』、大和書房、p. 117、1994、7、30、(里程比較表の部分)。
- 12) 前掲文献2-c), p. 328
- 13) 前掲文献4), pp. 302-305
- 14) 前掲文献1), p. 49
- 15) 前掲文献1), p. 41
- 16) 安本美典：『吉野ヶ里遺跡と邪馬台国』、大和書房、p. 116、1989年6月20日、36章の評題が、“標準里は400メートル”である。
- 17) 前掲文献2-c), p. 331